【成績】生存率及び寛解導入療法後非担癌例における無病生存率を比較すると cyclic 群は non-cyclic B 群とは有意差はないが，non-cyclic A 群と比べ，予後が改善された．

【結論】進行期上皮性卵巣癌症例に対する間歇化学療法は，延命効果に寄与する治療法の1つとして考慮する価値があると考えられた．

23）末梢血幹細胞移植併用大量化学療法を施行した婦人科悪性腫瘍症例の予後に関する検討

倉田　仁・常木郁之輔
東野　昌彦・青木　陽一（新潟大学産科婦人科学教室）
田中　憲一

【目的】末梢血幹細胞移植併用大量化学療法（HDC）が行われた11例（卵巣癌9例，卵管癌1例，PSTT 1例）の長期予後に影響する因子を検討した．【方法】初発例か再発例か，HDC 直前の遺残病巣の有無，臨床的緩解の持続期間と，HDC 後の再発の有無，再発までの期間との関連性を検討した．HDC は CBDCA（900－1500 mg/m^2），etoposide（900 mg/m^2）を選択した．

【成績】1）初回治療3例で無病生存（27－50M），3例で再発を認めた（3－13M）．再発2例で無病生存（1，44M），3例で再々発を認めた（2－8M）．2）臨床的緩解4例で無病生存（27－50M），3例で再発を認めた（2－6M）．非緩解1例で無病生存（1M），3例で再発を認めた（3－13M）．3）臨床的緩解持続期間が1－3M であった1例は無病生存（36M），3例で再発を認めた（2－6M）．持続期間が6－8M であった3例は無病生存（HDC 後27－50M）していた．【結論】長期無病生存が期待できるのは，HDC 直前に6M 以上臨床的緩解が持続していた症例であった．

24）進行乳癌に対する自己造血幹細胞移植併用大量化学療法

張　高明・広瀬　貴之（県立がんセンター新潟病院内科）
今井　洋介・石黒　卓朗
牧野　春彦・佐野　宗明（同　外科）

進行乳癌に対する術後補助化学療法としての CAF 療法および自己造血幹細胞移植併用大量化学療法の安全性，有効性を検討した．CAF 療法は3週おきに合計6コース実施．自家骨髄細胞は CAF 療法開始前に採取し，末梢血幹細胞は1コース目の CAF 療法後採取．大量療法は CPA＋Thio－TEPA を実施．23例（35－68歳）が登録され，CAF 療法中に4例が再発した．CAF 療法6コース終了後 TAM のみで経過観察している6例中3例で皮膚転移再発がみられた．大量化学療法は13例で実施され，血球回復も迅速で安全に実施可能であったが，治療後3例が再発した（肝：2例，肺：1例）．CAF 療法は G－CSF 併用によって十分な末梢血幹細胞が動員可能であるが，治療中あるいは終了後に皮膚転移再発が多く，局所照射療法の併用などの検討が必要と考えられた．大量療法の臨床的意義については現在，無作為化比較試験が進行中である．

Ⅱ．特　別　講　演

「自家造血幹細胞移植を用いた固型癌の治療」

東海大学医学部外科学講座教授
田　島　知　郎 先生